

特集「日本の国家アイデンティティの形成と‘土着性’の問題」：日本民族・文化の多様性

クライナー, ヨーゼフ / KREINER, Josef

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学 / INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

157

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

2014-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022469>

日本民族・文化の多様性

ヨーゼフ・クライナー

はじめに

本論は、普遍的な国家のアイデンティティではなく、個別的な国家の一つである、日本という国のアイデンティティと土着性を取り上げる。

民族学という立場から国家のアイデンティティを考えると、文化が中心的な問題となる。石田英一郎は言葉や社会を含めた文化を民族の基本的な定義と取り上げた。この場合、明治時代になって急速に行われた近代化、西洋化が、アイデンティティの形成にどのような影響を与えたか、あるいは、東南アジアやイベリア半島と進んで係わりを持った16世紀におけるアイデンティティの問題を論ずることも出来る。

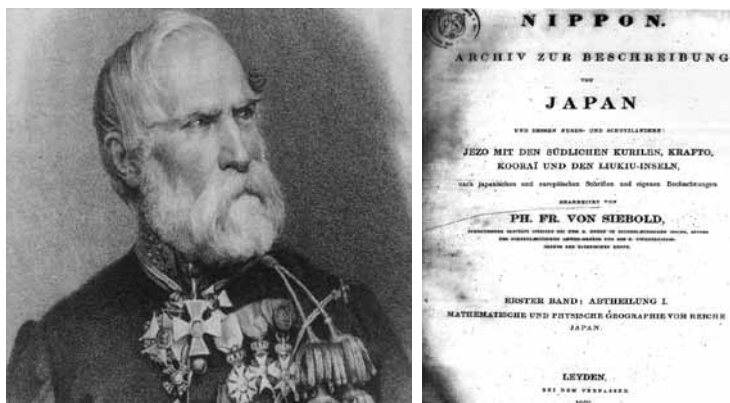
そのような中で、大和国家という古代国家の形成と、それに際しての文化の問題に焦点を絞ると、最初に名前を挙げなければならないのは、柳田國男である。柳田が注目したのは、文字を持たない、常にある日本人としての常民の文化である。しかし、今回は、柳田の話をする前に、ヨーロッパ人による日本研究から議論を始めよう。

1. フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトによる日本社会の研究

近世・江戸時代の日本の社会や文化については、ヨーロッパ側でも、例えば18世紀初頭には Engelbert Kämpfer ケンペルの著作『日本誌』等があり、また、日本の思想家たちも様々な学説を打ち出した。ただ、今回は便宜上、Philipp Franz von Siebold フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（いわゆる大シー

ボルト)の研究から話をはじめたいと思う。

周知の通り、シーボルトは、1820年代に約6年(文政6-12年)にわたって日本に滞在し、ヨーロッパに戻った後にその見聞を *Nippon*『日本』という大著(図1)にまとめ、ライデンから出版した。シーボルトのもっとも大きな業績の一つは、日本という国には、いくつかの文化が存在する、すなわち、日本は多種文化であるということに気付いたという点である。特に、江戸参府の際、交流を重ねた、幕府の北方探検者である最上徳内や間宮林蔵を通じてアイヌの問題を知ることになる。当時、北海道の蝦夷アイヌ、樺太のサハリンアイヌ、千島のクリルアイヌの3つの部族ないし種族に分かれていたアイヌの人口は、合計で約2万人であった。すでに伝統的なアイヌ文化は急速に失われ、アイヌ人たちが「シャモ」と呼んだ和人、すなわち日本人たちの文化に影響されて生活していた。



(図1) 大シーボルトとその著作『日本』(ライデン、1832年)

江戸時代において、シーボルトをはじめとして、ヨーロッパのアイヌの研究家は、アイヌは非常に古く、ヨーロッパの旧石器時代と比較できる生活、すなわち山や海での植物の採取と動物の狩猟を生活の基礎としていた。例えば、20世紀の30年代にフランスの民族学者 Georges Montandon ジョルジュ・モンタンドン あるいはウィーンの歴史民族学派の P.Wilhelm Koppers ウィルヘルム・コッパスがヨーロッパの旧石器時代と比較して研究し、その中で、19

世紀からとされてきたアイヌは白人であるという説を受け継いだ。

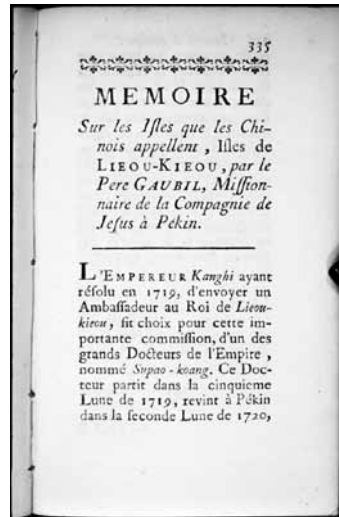
シーボルトはアイヌだけではなく、長崎の出島で島津重豪と会い、長く薩摩藩の支配下にあった琉球王国の話を聞くことも出来た。シーボルトは、弟子の高野長英に頼み、1719年に清朝の使節が琉球を訪問した際の見聞をまとめた文献『中山伝信録』をオランダ語に翻訳させた(図2)。偶然にも、この使節の徐葆光がまとめた見聞録は、フランスのイエズス会神父の Antoine Gaubil アントワン・ゴービルによって18世紀半ば1758年にパリでフランス語版 *Mémoire sur les Isles que les Chinois appellent Isles de Lieou Kieou* が雑誌 *Lettres édifiantes et curieuses* に出版された(図3)。結局、19世紀のヨーロッパにおける琉球王国に関する知識は、いくつかの経路でヨーロッパにもたらされたこのただ一つの文献、すなわち『中山伝信録』の内容に基づいている。

琉球についてシーボルトが気付いたのは、民間の村社会においては、女性の力が非常に強い、ということであった。現在では、日本の内地の文化が広まったことで状況が変わってきているが、琉球の文化を定義する際には、女性の力の強さはしばしば用いられる要素である。

また、シーボルトの *Nippon* 以来、一つの国に二つの民族と三つの文化、す



(図2) 高野長英のオランダ語訳の『中山伝信録』



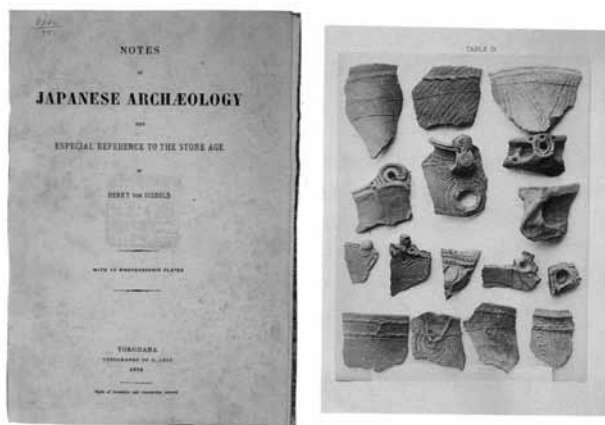
(図3) ゴービルの『中山伝信録』フランス語訳

なわち、日本という国に大和民族とアイヌ民族の二つの民族がおり、江戸を中心とする「内地」の文化、沖縄を中心とする琉球の文化、北のアイヌの文化という三つの文化がある、ということが、民族学において認められるようになったのであった。

2. モーストと小シーボルトによる日本研究

明治になって、近代の人文科学の中で最も早く日本に根を下ろしたのは考古学で、ヨーロッパとほぼ同時期に日本でも確立された。そして、1877（明治10）年、当時東京帝国大学の理学部の講師であった、お雇い外国人の米国人 Edward Sylvester Morse エドワード・シルベスター・モースによって行われた大森貝塚の発掘は、日本における考古学の起源であるといっていよう。1879（明治12）年、モースは、発掘の結果と解釈をまとめて、東京帝国大学理学部紀要の第1巻の巻頭論文として発表した。

モースの影響力は日本の国内外で非常に強かった。だが、オーストリア・ハンガリー公使館に勤めていた、シーボルトの次男で小シーボルトの呼び名で知られる Henry von Siebold ヘンリー・フォン・シーボルトも、モースと同じ時期に大森を含む関東一円で表面採取や発掘を行い、その成果を明治12年（1879年）に *Notes on Japanese Archaeology*（図4）として発表した。



（図4）小シーボルトの日本考古学ノート

二人の大森発掘の成果の解釈は一致しなかった。すなわち、モースは、遺跡の内容は日本人が残したものでもアイヌが残したものでもなく、アイヌ以前の、どのような民族であるかは分からないが、当時の日本に住む縄文時代の民族であると考えた。これに対し、ヘンリー・フォン・シーボルトは、出土品はアイヌの文化と深くつながるものであり、日本列島にはもともとアイヌが住んでいたが、後に渡来してきたヤマト民族によって少しずつ北方に追いやられたと考えた。

3. 人種置換説とコロボックル説

両者の説は、発表後約30年の間、研究の主流となった。すなわち、日本の自然人類学（形質人類学）の創始者の一人である小金井良精は、シーボルトの説を採って、「日本には元来アイヌ民族が住んでおり、後から日本人が入ってきた」という、いわゆる人種置換説を提唱した。これは、二つの民族の間には、何らの文化交流や文化的な接触もなく、混血もなく、全く置き換えられた、という考えである。

これに対して、東京帝国大学の考古学の主任教授であった坪井正五郎らはモースの考えを発展させ、大森の出土品の主がアイヌでないとするコロボックル説を唱えた。コロボックルとは、アイヌの昔話に出てくる背の低い小人のような人種のことである。しかし、これは最初はコロボックルが関東沿岸に貝塚を残した民族であり、北からアイヌが南下してコロボックルを追い出し、その後大陸ないし朝鮮半島から渡来したヤマト民族がアイヌを追い出す、という、コロボックルとアイヌ、アイヌとヤマト民族との間で2回にわたって人種の置き換えが起きたとする人種置換説であった。

人種置換説とコロボックル説は20世紀初頭まで学界の主流であった。しかし、1908（明治42）年3月15日「特殊部落の改善」という講演会の席上で喜田貞吉が発表を行い、柳田國男が猛烈な反論を行った。喜田貞吉は、『古事記』や『日本書紀』といった古代日本の文献に出てくる、隼人や土蜘蛛といった少数民族や、江戸時代における穢多や非人と呼ばれた者たちは、明治の近代化によって姿を消し「今日にては人種相異ならず」、すなわち日本の民族は一つに

なったのであり、これは明治の近代化の大きな成果である、と讃えた。柳田はこの研究会の幹事であり、幹事としては討論に参加すべきではなかったが、喜田の見解について、その時でも日本にはいくつかの異なる民族が住んでいることは民俗学の立場から認めることが出来る、と反論した。すなわち、柳田は、非定住、非水田稲作の民族の存在を強調したのであった。

4. 柳田國男と『後狩詞記』

この研究会に刺激を受けた柳田は、1909（明治 42）年に 6 ヶ月ほど福岡、熊本県の阿蘇・球磨地方、宮崎県の椎葉などを回り、焼畑農業を視察する目的で調査を行った。特に、熊本県の五木や宮崎県の椎葉では、当時でも焼畑農業が実際に行われており、調査することが出来た。

焼畑（図 5）は、斜面を焼き払い、地表がまだ熱い間にヒエやアワ、あるいはソバの種を撒き、実った後に収穫するというのを 1、2 年行い、その後はイモ類を栽培するか、栽培を終えて山に戻す、というものであった。あるいは、竹山を焼くと、約 5 年で元の竹山に戻るのを、その間、アワなどを栽培していた。

柳田がこの調査の中で気付いた問題の一つは、茶であった。すなわち、2 年間焼畑に使ってから元に戻した際、最初に生えるのが山茶であった。これを見た柳田は、一般に鎌倉時代に栄西らによって茶が中国から日本にもたらさ

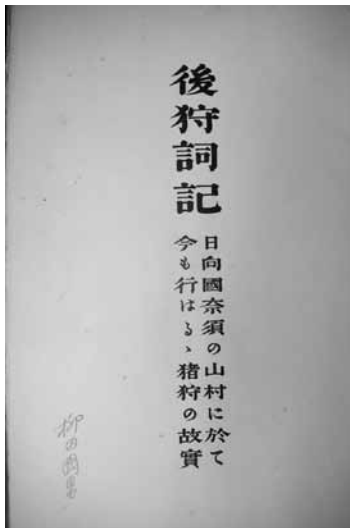


（図 5）宮崎県椎葉村の焼畑

れた、という話に対する不信感を募らせた。何故なら、焼畑は日本では縄文時代以来行われており、山茶はその頃から飲まれていた可能性があったからである。しかし、山茶は、柳田のいう「文字を持たない常民」の中で飲まれていたのであり、朝廷の中で飲まれる茶は栄西によって中国からもたらされたのではないかと思われる。

それ以上に柳田が重要だと考えたのは、この調査旅行の報告書の書名『後狩詞記』（図6）が示すように、狩であった。本書の副題は「日向国奈須の山村に於て今も行はるゝ猪狩の故実」であり、狩猟民族とその狩の有様に注目したのであった。

今でさえも椎葉村の住民に聞くと、「人間が勝つか、イノシシが勝つか」という戦いが続いているという。イノシシは田畑を荒らすため、放置すると人間の食べるものがなくなってしまう。そうなると、人間は、山から下りるより手段がなくなってしまうため、猪狩を行うのである。柳田が最も衝撃を受けたのは、この山村では、江戸時代に100丁以上の火縄銃が用いられていたということ、すなわち、豊臣秀吉の刀狩にもかかわらず百姓の手に鉄砲があった、という事実であった（図7）。



（図6）柳田国男『後狩詞記』



（図7）球磨郡のイノシシ狩り

あるいは、薩摩藩が出した「薩摩藩では、病人はもちろん、武士も戦いの力を保つために猪肉を毎日食べなければならない。よって、肉を食べないという幕府の命令は薩摩藩では守ることが出来ない」という趣旨の意見書から、九州におけるシシ肉の問題にも注意を払わなければならない。

椎葉村の頭領の屋敷の神棚と仏壇のある座敷の上には数十個のイノシシの下あごが並べられ（図8）、一つずつ、イノシシを捕まえた日付と犬の名前が記録されている。



（図8）椎葉村の頭領の座敷に飾ったイノシシの下あご

5. 日本文化の基礎としての山の文化と『山の人生』

柳田が当時問題視したのは、日本の国、あるいは日本の文化の基礎には、山の民、山に住む非定住のサンカの文化であった。山の民は、戸籍、義務教育、徴兵制の導入という明治政府の政策によって、徐々に定住することを余儀なくされた。戸籍も義務教育も徴兵も、定住していない者を捉えることが出来ないため、政府は定住を推進した。そして、最も問題になったのは、山を天皇の御用林とするという明治政府の政策であった。「天皇陛下の山」に勝手に火をつけることは大きな罪とされたため、非定住民の生活は次第に厳しいものとなった。

柳田は、近代日本社会が非定住民族に与える圧力を『山の人生』（1926〔大正15〕年）の中で紹介した。もし日本の文化を頭でなく心で理解しようとするなら、『山の人生』は最初に読まなければならない本であると私は信じている。ヨーロッパでは、例えばグリム兄弟が昔話の形で伝える、「暗い中世の昔の語りごと」としか考えられていない、例えば貧困により「親が子供を殺す」

といった社会事情が、20世紀前半の日本ではいまだに残っていたということを柳田は『山の人生』の中で指摘している。

そのまとめとして、1934（昭和9）年から3年をかけ、弟子たちを総動員して「全国山村生活調査」が行われた。しかし、これは、柳田が意図した成果を得られなかった。何故なら、当時、柳田はもう一つの日本民族文化に目を向けることになったからであると思う。

6. 『海南小記』と日本における水田稲作文化

柳田は、1921（大正10）年に沖縄に渡る前に、1920（大正9）年の大晦日の朝早くに大隅半島の南端にある佐多岬に立ち、目の前に広がる大海原に、南から北上する黒潮を認め、その向こうにはトカラ列島や屋久島や三島村といった島々の連なりを確認した。柳田は、『海南小記』（1926年）（図9）の中で、トカラ列島はじめ南の島の一行が「飛び石」であったことに気が付いた。中国南部に起源のある水田稲作文化が、稲の種を持って西南諸島を経由して飛び石のように北上する日本民族によって伝えられたという飛び石説、または、日本文化南方起源説を唱えた。そして、中国から琉球に人々が渡った理由は宝貝にあり、宝貝を求めて島から島へと渡り、最終的には近畿に根を下ろし、そこから南北に広がったと、最晩年の著書『海上の道』（1961〔昭和36〕年）で主張した。このような稲作民族の移動は、時代としては弥生時代に起きたというのが柳田の推定であった。それは、紀元前300年頃の弥生時代の出土品の中から、鍬・鋤と鎌、臼と杵といった、農作業に不可欠な、また20世紀半ばまでほとんど変わりがなく使われ続けた農具が出土したためである。

また、柳田は、稲作を行う社会も農機具と同様に変わっていないと考える。すなわち、田植え（図10）及び稲を刈り取る作業は集団で行わなければならないからである。後にマルクス主義の立場から Carl August Wittvogel カール・アウグスト・ヴィットフォーゲルは水を中心とする集団主義の社会として水力社会（Hydraulic Society）の概念で定義したが、このような考えは、日本の社会のあり方の一つの定義ともなるものである。例えば、柳田は『日本農民史』（1931年）の中でも指摘するように、どこからとなく一軒の農家が山間の



(図9) 柳田国男『海南小記』



(図10) 広島県の大田植え

谷間に入ってそこを切り開き、草分け本家となり、後に周りに出来た村の中心となる屋敷を持ち、その周りに分家が住み着く。分家が増えれば農地が少なくなるため、最も土地を持っているのは、祖先神である氏神の神官でもあった本家であり、分家は本家の小作となっているのである。このような考えを取り上げているのは有賀喜左衛門やその弟子である福武直であり、同じ系統に連なるのが中根千枝の「タテ社会」である。

日本の農村社会学は、西日本は講組結合の村落、すなわち、水呑百姓、あるいは、どんぐりの背比べといった小百姓の集まりである村落が多く、東北地方は本百姓、本家と分家の同族集団が残っている、としている。このような本家と分家の集団は、村の先祖に当たる氏神を祭っている。

7. 折口信夫と来訪神の概念

柳田の祖先神＝氏神という説に対しては、同僚に当たる折口信夫が、まれびと＝来訪神説を打ち出した。すなわち、神々は村や人間の世界に常にあるのではなく、正月や豊年祭といった時を決めて、海のかなたの常世の国から人

間の世界を訪れ、富や恵みを人間に与える、というものであり、そして、村の若者が仮面仮装によって神々の来訪を表現し、これが猿楽、田楽、能といった日本の演劇の起源になる、という説である。

折口のこのようなマレビト説は、欧米の偉大な宗教学者である Mircea Eliade ミルチャ・エリアーデが取り上げている。柳田の弟子である堀一郎がエリアーデを翻訳することによって日本でも折口の説の普遍性が知られるようになった。

現代にも残るマレビトの例は、東北のなまはげであり、八重山の赤マタ・黒マタ、マユンガナシ、そして九州のめしきい祭等である。めしきい祭（図 11）は、村の男性一人に、マレビトの象徴である蓑と笠を着てもらい、「神にその年収穫された新しい米を食べてもらう」ということで、高くよそわれた米飯を食べさせるのである。



（図 11）熊本県南阿蘇村の飯食祭

8. 柳田國男と折口信夫の説の継承と発展

こうした柳田と折口の考え方を受け継ぎ、岡正雄は 1933（昭和 8）年頃から古日本の文化層をさらに細かく分類することができ、その相互の関係を検討することができるだろうと考えた。しかし、天皇家はツングース系騎馬民族で、

朝鮮半島を経由して日本に渡来し、アマテラスは伊勢の神ではなく、伊勢に祀られている『古事記』に最高神として記されている高木の神である、という考え方は当時の日本では危険思想であり、岡はヴィーン大学に提出した博士論文 *Kulturschichten in Alt-Japan* (「古日本の文化層」) の中で議論を行った。日本でも、戦後になってそのような議論が行えるようになり、岡は 1948 (昭和 23) 年の学際的なシンポジウム「日本民族文化の源流と日本国家の形成」(図 12) において、古日本の文化層について議論した。このシンポジウムには、座長として石田英一郎、また江上波夫と八幡一郎が参加した。その時点から岡説が 20 世紀後半の日本の文化人類学において議論された説の出発点となった。

例えば、佐々木高明の『稲作以前』(1971 年) は岡説をふまえて縄文時代に既に焼畑農業が日本で行われていたと強調した。また、坪井洋文の『イモと日本人』(1979 年) におけるイモ文化説や、中尾佐助、佐々木高明を中心とする、中国西南部から日本に至るまでの照葉樹林地帯におけるすしや茶といった文化は、日本の文化の中心になる、という照葉樹林文化説などである。あるいは、歴史学の分野も注目した説としては、江上波夫の騎馬民族王朝説である。江上は、天孫降臨神話が満州族やツングース族、あるいは朝鮮王朝の起源神話の内容と全く同じであること、『古事記』・『日本書紀』の「高千穂のクシフルの峰」



(図 12) 日本文化の起源を討論した国際シンポジウム



(図 13) 高千穂の峰の天の逆鉾

(図 13) は朝鮮語から解釈できることなどから、1967 (昭和 42) 年に『騎馬民族国家』を出版した。江上は、古代ヤマト国家は蒙古系統の神話を持って日本に入ってきた古墳時代の民族によって創られたのではないかと主張した。

このような考え方は他の分野にも影響し、例えば言語学では大野晋の『日本語の起源』(1957 年) や歴史学での井上光貞の『日本国家の起源』(1960 年) などがある。もしこれらの説が正しいのなら、「何が元来日本にあったのか」「何が後に変わったのか」ではなく、大陸のいくつかの異なった地方から時代を異にして新しいものが次々にもたらされ、それらが積み重なった上で日本文化ができたということになる。その場合、「日本文化」はいつ頃から生まれたか、という点については、石田の文化人類学の立場から定義する「超歴史的なパターン」、すなわち、水田稲作と稲作の集団主義社会が手がかりになるだろう。

おわりに

かつてシーボルトやモースが討論した、「一つの国、二つの文化、三つの民族」という日本に対する見方がより複雑になる。例えば、アイヌ文化とマタギの狩猟文化にはいくつかの共通点があるのではないかと。また、アイヌはすでに江戸時代には北海道の南部で農業を営んでいたが、その農業は日本の農業とどのような関係にあるのか、あるいは、日本の農業の本質は水田稲作にあるのか、それとも南九州・南西諸島のアワの焼畑作にあるのか、というように複雑なものとなる。

筆者自身はヴィーンで生まれ育ったが、家族は現在のクロアチアから出ていて、ハンガリー人の血も入っており、母方の祖父はズデーテンドイツ、すなわち現在のチェコからやって来ており、その意味で様々な要素が混ざり合っているといえる。これはおおよそのヴィーン人がそうである。日本人が、他と比較できないような民族、他の理解が不可能な民族ではなく、多様な要素が混ざり合った民族であるとすれば、われわれもより容易に日本の文化や日本人というものを理解することができるのではないだろうか。

<ABSTRACT>

Ethnic and Cultural Plurality of Japan

Josef KREINER

This paper examines the ethnic and cultural autochthony of Japan through a review of paradigms in ethnology = cultural anthropology. In this process we discussed discourses of ethnologists, anthropologists or representatives of folklore studies like Edward Sylvester Morse, Henry von Siebold, Tsuboi Shōgorō, Torii Ryūzō, Koganei Yoshikiyo, Yanagita Kunio, Orikuchi Shinobu, Oka Masao, Izumi Seiichi and Sasaki Kōmei. As a result we could show that the ethnic and cultural autochthony of Japan is not a genuine and singular one but a pluralistic and complex one: we can adduce at least two “races” (the Yamato race and the Ainu race) and three cultures (the culture of Japan’s mainland, Okinawan culture and Ainu culture). At the same time, inside of Japan’s mainland, there is a great regional diversity of cultural elements and clusters. To pay attention to such a plurality will be beneficial when examining the “national identity” of Japan.